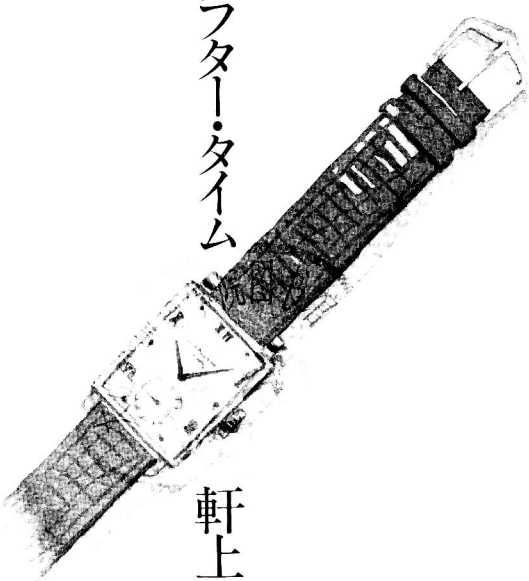
タイム・アフター・タイム

軒上泊

Time after Time ★ Haku Kenjo

タイム・アフター・タイム



軒上 泊

タイム・アフター・タイム

著者／軒上 泊

1988年9月30日　第1刷

発行者／荒井　修

発行所／株式会社徳間書店

郵便番号 105/東京都港区新橋 4—10—1
電話 東京(433)6231 代表／振替東京 4—44392
印刷所／図書印刷㈱
カバー印刷／近代美術印刷㈱
製本所／大口製本印刷㈱

定価は帯・カバーに表示してあります。
© Haku Kenjo, 1988
乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。
〈編集担当　今井鎮夫〉　Printed in Japan

ISBN4-19-123752-7

☆タイム・アフター・タイム／目次

第1章　ハーレムの風に吹かれて　5

第2章　ラヴ・フォー・セールが聴こえる　35

第3章　マーシー・ブラウンの悲しみ　67

第4章　左ストレート・ハイウェイ　97

第5章　カウボーイ・ストリート23時　127

第6章　街を笑え、とパイラーは言った　155

第7章　闇へ飛んだマリー　193

第8章　バージニアビーチ・フェスティバル　223

第9章　エンディングまで100フィート　259

Cover illustration and design by Goro Sasaki

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

タイム・アフター・タイム

私をその気にさせた

〝マンハッタンの地図〟と呼ばれた彼らへ

第1章

ハーレムの風に吹かれて

ちくしょう！　眼の前がだんだんと霞んできやがったぜ。
ほら、あのニュース・スタンドの先の壁に貼りついてる、昔かたぎのばかでかい映画の看板――。ショッキング・ピンクのスカートへ風を誘いこんだ、マリリン・モンローのセクシー・ポーズでさえ、ちっともセクシーでもショッキングでもなくなってきやがったぜ。まったく、今のおれにゃあ、マリリンが、あの世のベッドへ誘ってくれそうな娼婦みたいに見えらあ。そのくせちっとも発情してこないおれの頭は、ニュー・フェイスの〝デヴィル・ドラッグ〟でイカれてしまったオカマのようなもんさ。
いいさ。気にしなくていいぜ。ここは、マレー・ヒルでもアッパー・イーストサイドでもないからな。その辺で邸宅を構えておられる方なら、このハーレム界隈のベッド・ルームなんぞは、路上に汚れたアッパー・シーツを広げたような部屋だとおっしゃるだろうが、おれだって逆にそのての見方ぐらいはできるさ。なにしろこの、光さえ闇から吹き出た汗にすぎないような一画で生まれ育ち、小便と、安酒と、腐った人生の臭いでいっぱいのどす黒い通りで、ろくでもないことを次から

次へと叩き込まれてきたんだ。なあに、道路で学んだ人間が、通路でけりをつけられたってなんの不思議もないってわけさ。

そういやあ、死んだおふくろがいつも言ってたもんだぜ。

「いいかい？　今日、街でろくでもないことを教わったんなら、今夜眠ってるあいだに、ベッドでそいつを全部捨ててしまいな。人間にはそれしかやり方がないんだからね」

もちろん、おれにはわかっていたさ。この、おふくろの忠告にはひとつ言葉が欠けてたことをだ。つまり、ハーレムの人間には、と言いかえなければならないってことをな。

だから、おれがこんな道端でぶざまにへたばっていようと、あんたは少しも気にしなくていいぜ。おれにとっちゃあ、この汚れきった通りをベッド・ルームに見立てるテクニックなんぞはわけない。それより、おふくろの言い草を使えば、今さっき街角で叩き込まれた事態をうまく路上で捨てられるかどうかだ。くたばった時のおふくろが、それまでの人生で味わったろくでもないことを全部首尾よく捨て終えたような死顔になってたみたいに、これから、おれの面がそんなエンディングを迎えられるかどうかだ。そいつをあんたが見届けてくれると助かる。なにしろ、まだあんたのような人間がこのハーレムに、いや、あのやせっぽちのビルディングの先を競って空へ近づけ、ついでに、ささやかな夢まで高嶺の花にしやがったこの〝巨大なアップル〟に、そうさ、あんたみたいな人間が歩いていたってだけでも不思議だ。この街じゃあ、殺人沙汰に驚くなんて感受性は、ましてや、路上でくたばりかけてる人間に近寄るなんてヒューマニズムは、じっさい、五番街の〝ティファニー〟を丸っぽ買いきるよりも値段が高いときている。そのくせ、ノンフィクションの殺しより、ブロードウェイの舞台で演ってる小娘たちの仮面劇のほうが、人の心を動かしてるような街だ。まったく、事実はどんどん腐りつづけて、フィクションは日増しにたわけたメルヘンを肥らせていくば

かりだ。
でも、もうそんなはしゃぎすぎた時代の、はしゃぎ方を間違ったハートのパレード風景なんぞはどうでもいいさ。それより、あんたのその白いシャツにおれの血が付かないようにしてくれ。まだしばらくは、この腹から威勢よく血が流れてくれるだろうからな。第一、あんたのシャツを台無しにしたって、おれにはもう新品のシャツを買って渡すことさえできないもんな。
いいから……。おれにはわかるんだ。なにしろ、ガキの頃から、ナイフで刺された奴を何人も見てきたキャリアだけはあるから。もっとも、このハーレムじゃ、たいして役にも立たないような経験だったがね。しかし、ここへきて、そいつを使えるチャンスが巡ってきたってわけだ。おれには先が読めるよ。こうまで深く刺されてしまえば、残された命は〝ポスト・ハウス〟でロブスターにパクついてる、アッパーたちのディナー・タイムよりも短いだろうってことが。
だから、何も喋るな——。黙って静かにしていろだって？
そいつはできない。できるわけがないさ。もう今のおれには、喋ることしかスタンド・プレーの術が残されていないからな。あんたには悪いが、しばらく観客のキャストを引き受けてくれないか。なあに、そんなに手間は取らせないはずだ。あんたは、ちゃちな街頭劇でも観ているようなタッチで付き合ってくれりゃあいいから。とにかくここにいてくれ。何も、急いで救急車なんて呼びに行かなくてもかまわないさ。
見ろよ……。スラムの窓から小僧たちが笑顔でこっちを見てるぜ。やがては奴らも、人はこうして簡単に死ぬのに、簡単に生きることはできない——、そんなからくりを学ぶはめになるんだ。そして、堂々めぐりの足取りで行き交う大人たちを見てみろ。奴らは、ちらっとおれの腹のあたりへ眼をやったきりで行き過ぎていく。もしもまだこの街に、救急車を呼ぶために公衆電話へつぎこむ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

二十五セントの憐れみと、救急隊員が一人でもセンターに居残ってるだけの平和があるなら、そのうちに車がきちんと制限速度を守って走ってくるさ。もっとも、おれを乗せた救急車は、病院へ行き着くまでに霊柩車に変わってしまうだろうが。

そうか。聞いてくれるか？　いや、嬉しいよ……。だけど、まさかあんたみたいな人間がこの辺に住んでるわけじゃあないだろう？

……やっぱりな。するとあれかい？　グリニッジ・ビレッジへでも向かってたつもりが、方角をまちがって、五番街を、このブラック・ハーレムの入口まで逆に来てしまったってくちかい？　いや、べつにあんたをからかってるわけじゃないんだ。なにしろ、この辺で日本人を見かけるなんてめったにないことだからな。五番街も、エンパイヤ・ステート・ビルのあたりは真っ白みたいなもんさ。続くロックフェラー・センターから、白亜の〝メトロポリタン〟のあいだもまだまだ白いよ。だけど、そこを過ぎると、五番街はだんだんと灰色になってきやがる。そしてやがては、通りは真っ黒に染まってしまうというわけなのさ。

なのに、なんであんたはこんな所へ足を踏み入れてる？　逆におれから訊くのも妙なもんだが、なにしろ日本人と話をするなんて初めてなんだ。

……そうか。そんな友達がハーレムにいたのか。あんたも昔はこの辺に住んでたことがあるのか。それで、平気な面で一人でこんな所を歩いているってわけか。

するとあれかい？　そいつは、せっかく若僧時代にボクシングをやってたのに、結局ドクター・ストップをかけられて、パンチ・ドランカー寸前にジムとさよならしたってわけかい？

何を？　あんたもだって？　だけど、ドランカーになりかけたって風には見えないぜ。……なるほど、じゃあ、何かい？　医者が言うには、ベッドで、女に頭を叩かれてもどうってことはないけ

ど、リングでパンチをくらえば頭がイカれる――。そんなところか？　まったく、近頃じゃあ、ボクシングまですっかりお上品になってきやがったよ。このぶんじゃあ、近い将来、リングでホモのカップルが、ラヴ・シーンのひとつもやってるみたいなゲームになってしまうぜ。

……ああ、そうか。そういうことだったのか。つまりあんたは、おれがそいつじゃないかと思って近寄ってきたってわけかい？　とんだ人違いだったが悪く思わんでくれよな。

ちくしょう。せっかく話し相手がいてくれるっていうのに、おれは何をもたもたしている。これじゃあまるで、もう一〇〇年以上も昔に、このハーレムに住みついたオランダ貴族の御子息が、どこぞの御令嬢に恋心を言いだしかねてるみたいな風だ。おまけに、おれがこれから喋ろうとしている話も、そのてのパターンと似ている面がなきにしもあらずときている。まったく、われながら笑ってしまうぜ。あんたも、話を聞きながらゲラゲラ笑ってくれたって構わないさ。なにしろ、その話っていうのは、ハーレムの貧乏人どもがわんさかぎゅうぎゅう詰めにされてる、低所得者団地に住んでる男と、大学で社会福祉なんぞを勉強している白人娘の、そうさ、ちょいとタイトルをつければ〝路上の愛の物語〟ってところだもんな。

それじゃあ話すよ。とにかく、おれにとっちゃあ最初で最後のエンタテナーぶりだ。できるだけ喜んでもらえるよう努力はさせてもらうぜ。

2

……じっさい、おれとドロシーはいつも道路で会ってたみたいなもんさ。二人の物語をブロードウェイで演るなら、大道具係の仕事なんぞは気楽なもんよ。なにしろ、舞台装置は、初めから終わ

りまで道路の一画だけで済むわけだし、材料なんぞは、それまでの演し物で使った板をつなぎ合わせて、それこそ、古ぼけたビルの外壁ぐらいを作ればいいんだからな。そして、あとはペンキで〝ファック〟や〝プッシー〟のたぐいを書きなぐり、ついでに、おもしろがって、舞台の上にゴミや空缶をばらまいとけば仕事は終わりみたいなもんさ。

そうさ。おれとドロシーは、ここから北へ一マイルと離れていない、そんなすさみきった通りの真ん中で出くわしたんだ。おれもあいつも十八――。そのこと以外はなんにも共通するものなんかはなかった。強いて挙げれば、七年前のあの十月下旬、ハーレムの一帯が、そこにはお似合いのしけた宵闇で染まっていた時刻に、おれとドロシーが偶然同じ通りを歩いていたってことぐらいだ。

おまけにおれとあいつは、出会った時から厄介な立場に置かれていたんだ。もちろんそれは、そこが始まったばかりの恋の現場というには、あまりにも汚れきった場所だったということなんかじゃないさ。たしかに、左右のスラムの窓からは、スラムが名物としている、何組かの夫婦が派手に罵り合う声やら、まだ人生のしょっぱなから、諦めを叩き込まれるためにほったらかしにされてる、複数の赤ん坊の泣き声やらがひっきりなしに聞こえてたよ。そして、ビルを染めてるちゃちなネオンは、情熱よりも血の色を連想させたもんだし、ダウンタウンからのおこぼれで吹いてきた風に、路上のチラシは揃いも揃って狂ったように浮かれる始末だ。

だけど、そんなのはドロシー一人が立ってるだけで、ビバリー・ヒルズの一画よりも乙な場所だと錯覚できたよ。そうさ。問題は別のところにしっかと控えていたんだ。その問題は、ドロシーのすぐ隣りであいつとセットでくっついていたんだ。つまりは、ボブ・ウォーラーという名前を与えられてだ。

「よお、デューク。どこへ行くんだ。仕事か？」

ボブはやけに明るい調子で、おれを見るなり声をかけてきたっけ。その時すでに、ボブの右手はドロシーの肩へ置かれていたのだし、彼女の顔には真っ白な笑みが広がっていたんだ。まったく、これじゃあ、おれは一周遅れで、ゴールまで一マイルの〝ドロシー・レース〟にスタートを切ったみたいなもんさ。

すかさず、ボブは余裕で尋ねてきやがったぜ。

「デューク。お前、今でもまだ例の仕事をやってんのか？」

おれは黙ってうなずいた。事実だから仕方がないさ。ボブと会うのは半年ぶりだったが、おれの生活は四月と少しも変わっちゃいなかった。そうさ。あれから七年経った今も当時とまったく同じさ。マディソン街のスーパー・マーケットで、客が胃袋へ詰め込んだ商品の補充をしていくスタック・ボーイがおれの仕事だ。

「お前にゃ悪いが、こっちは順調に昇っていってるぜ」と、ボブはまさに御機嫌だった。

おれはといやあ、いつものスーパー・マーケットへ出かけてみたら、店の商品がごっそり売れてたみたいな面で突っ立ってる始末よ。

「噂で聞いてる。スクリュー・ボールを覚えたって話だ」

「まあな。まだコントロールがイマイチだが、それだって時間の問題さ。――デューク、ガキの頃、お前とやった盗みのおかげで、指先が鍛えられたような気がするぜ」

言ったあと、ボブはしまったという顔で、ドロシーの顔をちらっと覗き込んだ。ドロシーは、少しばかりうつむきかげんになっていたっけ。

おれは慌てて、

「盗みのせいじゃないさ」とこうさ。

はたしてボブをかばっていたのか、自分のイメージ・ダウンを避けたいと思っていたのか、とにかく笑いながらすぐに返事を補ってた。

「盗みは一回きりだもんな。やっぱり、お前にはピッチャーの素質が備わっていたんだ」

ボブは照れ臭そうに笑う。奴は少々口は悪いが、決してたちの悪い男じゃなかった。それに、ボブとおれとは同じブラック・ハーレムのあのけちなコンクリート・スラムで、ガキの頃からずっと一緒に遊んできた仲だもんな。五歳の時に初めてベッドで大人の男と女が、せっせと現実を忘れてやがんのを見たのも二人でだったし、七歳の時から五年ばかり続いた盗みも、ほんとはいつもボブが相棒だった。十二の時のマリファナもそうなら、色気づいてからこっち、可愛い女の子を物色して街を流していたのもあいつと二人だ。ほかの連中と喧嘩になって、おれがあいつを、時にはボブがおれを助けたのも一度や二度じゃなかった。

だから、今になっても思うことがあるよ。もしもドロシーの恋人があいつでなければ……。あいつがおれの親しい友人なんぞでなければ……。

ボブは言ったぜ。

「デューク。ほんとに順調なんだ。初めてのシーズンで、まだルーキー・リーグだけどよ。完投で十五勝も上げてきたぜ。負けはたったの二つだ。来年は、悪くてもＡＡＡには入れるだろうぜ」

ボブの顔にはイキのいいピッチャーにぴったりの自信が浮いてた。そしてドロシーの顔には、そんな男を恋人に持った女の子にふさわしく、いかにも幸福そうな笑みが広がっていた……。

じっさい、これじゃあ笑われても仕方がないさ。まだ出会って五分と経っていないというのに、おれの胸ん中じゃあ、ドロシーへの〝アイ・ラヴ・ユー〟がさざ波のようさ。だけど、おれが割りこむ余地はなかった。決して、ボブがおれの親しい友人だったせいではなくてだ。

「デューク。これから久しぶりに自宅へ帰るんだ。ドロシーを、おふくろと弟に紹介するためにな。よかったらお前も付き合わないか？」
もちろん付き合ってもよかった。だけど、おれはとっさに答えていたんだ。
「今日はやめとく。おれもこれから女の子と、ブロードウェイで〝キャッツ〟を観ないといけない」
たわけたジョークと思ったらしくて、ボブは腹を抱えて笑ってやがった。
「お前が〝キャッツ〟だと？　空地で、さんざん猫を蹴ってきたくせして、女の子と二人で〝キャッツ〟を観るだと？　デューク。舞台の猫どもにかまれないよう気をつけろ」
おれはボブの忠告に気圧され、へたな作り話を見破られた気がした。その日はもちろん、女の子と〝キャッツ〟を観るなんてスケジュールはないさ。そりゃあおれだって、十四の時に十八の女と寝たのがスタート、その後も適当なレベルで折り合いをつけて、まずまずのローテーションで何人かの女と付き合ってはいたよ。しかし、その頃はちょうど、ローテーションにぽっかりと穴が空いてた。早い話が、ブロードウェイの裏手に立ってる〝野良猫〟と商談をまとめに行こうとしていただけの話だ。
おれは話題を変えた。
「それよりボブ、おれはまだ、彼女を紹介してもらってないけどな」
「ああ、そうだった」とボブは照れ笑いだ。
おれはドロシーを見直し、胸ん中のさざ波に少なからず焦れていた。
「名前はドロシー。年は十八。もっか、コロンビア大学で社会福祉のお勉強中さ」
ボブはそこでいったん言葉を切ると、唇を歪めて冗談めかした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.